



Title	趣旨
Author(s)	蔵田, 伸雄
Citation	応用倫理, 10(Suppl), 1-2
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/72174">http://hdl.handle.net/2115/72174</a>
Type	bulletin (other)
File Information	drift.pdf



[Instructions for use](#)

## 公開シンポジウム 「教養とジェンダー」

### 趣旨

蔵田伸雄（北海道大学大学院文学研究科教授・同応用倫理研究教育センター長）

「教養」が日本から、そして大学から失われて久しいと、懐古の念とともに（特に男性によって）言われることは少なくない。古典文学や思想、芸術といった「教養」は、純粹かつ崇高で世俗的なものを越えた価値を持ち、人格を陶冶するものだと考えられてきた。ゲーテや岩波文化に代表される「教養」こそが、人間性を真に豊かにするものだと考えられていたのである。また啓蒙主義以降のヨーロッパ、さらに明治期以降の日本の「教養」とは、若者がそれを武器にして、古い因習から自らを解放し、自己を確立するための手段でもあった。特に日本では、多くの場合「教養」は「西洋の文学・芸術や思想についての知識」を意味していたので、外国語にアクセスできるものだけが「真の教養」の持ち主だと考えられていた。そして旧制高校や大学こそが、そのような「真の教養」を（ただし正規の授業の外で）得ることができる場所だと考えられていたのである。また出世に背を向ける「煩悶青年」にとって、「教養」つまり世俗的な価値から自由である文学・哲学・芸術を求めることは自らの人生の意味への答えを探す手段でもあった。

その一方で、このような男性的「教養」を補完するものとして、女学校的な「教養」も存在していた。女性にとって「教養」とは自分たちを古い規範や社会的な束縛から、そして男性たちから解放してくれるものであると同時に、自分の価値を高めてくれる文化資本でもあった。このように「教養」は女性のジェンダー的な自己理解の形成においても、間違いなく一定の役割を果たしてきた。

しかし、このような「教養」観はある種の歪みを含んでいた。旧制高校的な「教養主義」にある種の権力性、男性性、抑圧性、支配性そして女性排除の構造があったことは否定しがたい。「教養」は帝国大学等に進学するエリートの特権階級の男性たちが、自分たちを非エリートから（そして「お勉強ができる」だけの凡庸な世俗のエリートから）、さらには女性から差異化するための道具としても機能していた。「教養」重視の風潮には「語学や知識を教える男性」と「それを教えられる女性」という形で、性的役割を固定化するという側面もあった。「教養」にあこがれる女性たちにとっては、「教養」がジェンダー的規範から自らを解放してくれるものである一方で、「真の教養のとりあえずの主体である男性たち」とどう関わればよいのかということが大きな問題となった。また「西洋の教養」を求める「自由な」女性たちは、文学作品の中で不道德な存在として描かれることもあった。

戦後、大学の共学化や増加とともに「教養」の代表である「文学」は大学で広く教えられるものとなった。そして「文学部」の中で増えていく「勉強熱心な」女子学生たちは、そのような文学教育の中で、正規の教育を批判する機能をもっていた真の「教養」に触れることができない者として揶揄される存在でもあった。

このように「教養」は近代日本の女性・男性のジェンダー規範の形成において大きな、しかしいびつな影響を与えてきたとも言える。「教養」とは固定化されたジェンダー観を隠微な形で再生

産する社会的な装置でもあったと言えるかもしれない。

第二次大戦後の文化の大衆化の流れを経て、もはや「教養」は憧れの対象ですらない。そうであれば、そのような「教養主義」のもつマイナスの側面も無くなったということになる。しかし「教養」はもう人々を解放する力をも失ってしまったのだろうか。「教養」は私たちの固定化されたジェンダー観を崩していく力を再び持つことはないのだろうか。そして大学や高等教育機関は「教養」とどのように関わっていけばよいのだろうか。

このシンポジウムは、そのような疑問に答えることを試みるものである。